残そう東松山の民俗行事
“防ぎ”の調査と記録
悪霊疫病をフセグ
祓う
追い出す・流す

郷土学部Aグループ

石橋 重寅　齊藤 善重
田中 美行　冨田 和子
中山 保彦　西村 裕
沼尾 宰次　林　光朗
眞野 昌平　松崎 和正
向笠 親雄

項目

はじめに（防ぎ）とは
1、フセギ
1）西本宿（西1）のフセギ
2）西本宿（西2）のフセギ
3）望月のフセギ
2、大般若講
1）下青鳥(下郷地区)の大般若講
2）下青鳥(上郷地区)の大般若講
3、お獅子様
1）大字古凍地区のオシッサマ
まとめ（考察・提言）

テーマ選定にあたって

いにしえより多くの人々は未知のことや自然に対して畏怖と畏敬の念を抱き、その気持ちをいろいろな方法で現わしています。農業を主としていた時代、人々は年間の農作業を通して、それぞれの地域ごとに特徴のある民俗行事を行ってきました。これらの行事は、同様な呼称で呼ばれていても、地区ごとに特徴があります。しかし現状では、農作業の機械化、核家族化、少子高齢化などの社会現象が、これらの民俗行事の継承に影響を及ぼしている気がします。例えば、住民間のコミュニケーションの希薄化などです。そこで私たちは、東松山市に残っている民俗行事「フセギ」、「大般若」と「お獅子様（オシッサマ）」の3行事を現地調査し、さらに視聴覚の記録で残してゆくことに取り組みました。

はじめに　防ぎ　⇒県立歴史と民俗の博物館資料を使用

科学技術の未発達の時代にあっては、人々は、災害やはやり病などの災厄は悪霊のなせる業と信じており、その悪霊が地区内に入らないように未然に防ぐ、地区内を巡って災いのもとを祓う、悪霊を地区の外に送り出す、流すと言った行事が広く行われていた。

その代表的なものとして「フセギ」、「蛇祭り」、「お獅子様」、「百万遍」、「大般若」などがあげられる。そこで悪疫退散を目的に行われるこれらの行事のうち東松山地区の現状を調査することにした。しかし人的また期間的な問題もあり、「フセギ」、「お獅子様」、「大般若」の３つについてグループ分けをして調査をおこなった。

１、フセギ

（１）フセギとは

フセギとは、疫病や厄災などの悪霊が、その地区に侵入しないように、ワラジなどの藁製品を飾り、共同で祈願する民俗行事であり、日本全国広く行われていた。

形態は、本来「道切り」・「辻切り」として地区の入口の道路の上を横断するように飾り、結界を作るものである。その飾りにはワラジ、しめ縄、お守りなど地域、地域により異なっている。

しかし時代の流れとともに、その形は変化しており、飾る場所は自動車の増加に伴い、交通の邪魔にならないよう道路の横断をやめ、道端に立てる。また実施日も日曜日が主体になってきている。

（２）東松山市内のフセギ実施地域（２０１１年現在）

東松山市高坂地区　後本宿（２月の初午に近い日曜日）市指定無形民俗文化財
悪戸（２月の初午に近い日曜日）
西本宿：西１（４月の日曜日に春祈祷を兼ねる）
西２（３月１０日に近い日曜日）
望月（７月の第１日曜日）
＊以前は毛塚や田木でも行われていたが、今は行われていない。

東松山市石橋地区　内青鳥（４月２２日）

（３）東松山のフセギの特徴

飾り物の基本は、以下の物である。

①お札（神社やお寺からもらい飾り付ける。中には祈祷の呪文が書いてある）
②笠（桟俵）
③穴のあいたワラジ⇒女陰にたとえている。
④男の物（男根）
⑤青竹
⑥サイコロ（これは後本宿に特有で、多くの目で睨みを利かせ、悪魔を退散さ

せる意味がある。）

注）性器の飾りは、現在では東松山を中心とした比企地区に多い飾り物である。ワラジと男の物で、男根・女陰の性を表しているのは、五穀豊穣、さらに子孫繁栄をも祈願している。またワラジは足腰が衰えないようにとの祈願の意味もあるようだ。

１）西本宿（西１地区）のフセギ

１、背景

西本宿地区は高坂丘陵の中央に位置している。この地は江戸時代、本宿村と呼ばれており、明治１２年、郡役所ができ、松山町の本宿との混同を避ける意味から、西本宿村になったそうである。現在は東松山市西本宿である。

西１地区は戦後しばらく戸数は４０戸程度、農業が主体の地域であった。そのため、フセギは、春祈祷の行われる４月４日に１日でフセギ作りと路傍への飾り付けが行われていたそうだ。皆が農家のため、縄をなうなどの藁の扱いは朝飯前だったのだろう。

しかしこのフセギも昭和３０年代初めには１度途絶えてしまった。しかし平成１１年か１２年ごろに当時西本宿地区の世話人をされていた滝上氏の音頭で再開されたそうである。そしてこの民俗行事フセギが今に伝わっているのである。

近年は、西１地区も、他からの新規住民も多く、現在では１９２戸となっている。稲作農家もわずか１軒となり、フセギもフセギ作りに１日、フセギの飾り付けに１日と２日間をかけて行っている。

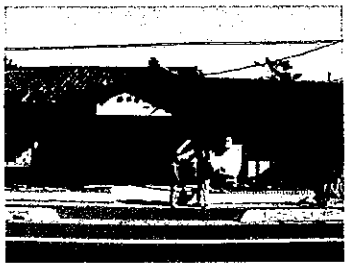
２、フセギ行事-１

（１）フセギづくり

日時　　２０１１年3月２７日（日）９：００~１１：００　２時間程度

場所　　西本宿農民センター

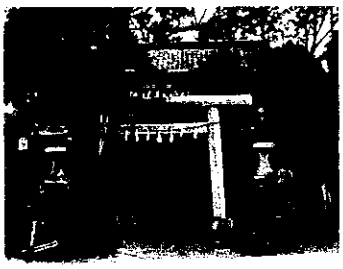
参加者　拂田稲荷神社（ほった様）の氏子総代
松井友美氏、
当番４人
西１の住民約１５名



（２）フセギ作成手順

住民は、９時に農民センターに集合し、フセギ作りに取り掛かかった。

なおフセギの構成部品は地域、地域により異なっているが、ここでは次の物から構成されている。



・葉の付いた緑の竹、長さ３m程度
この竹につけるものに
・拂田稲荷神社のお札
・藁の笠（サンダラボッチ＝桟俵法師）
・藁のワラジ（女陰をあらわす）

・藁の男根

以上の物を、地区の入口４ヶ所に設置するためフセギは４セット必要となる。

必要な藁は、知人に頼み事前に手に入れておき、必要に応じて湿らせたりしておく。そうすることにより作業がやり易いそうだ。しかし近年、水稲農家が減少し、藁の確保も簡単ではないようだ。

次に、フセギの構成パーツごとに、作成手順を追ってみよう。

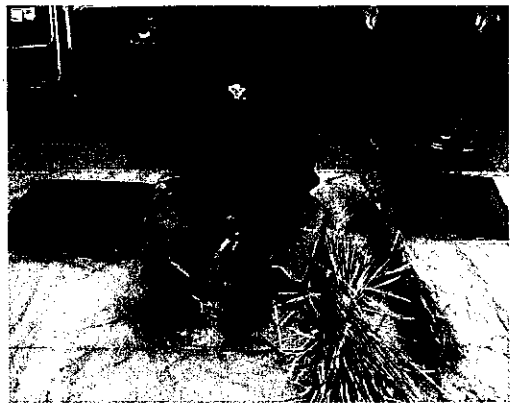
①藁打ち

作業は、材料の藁打ちから始まる。藁を打つことにより、藁を柔らかくするのであるが、ワラジや縄は柔らかめ、男根や笠の藁は固めの方が扱いやすくて良いという。

②縄作り

昔は農家であれば誰でも出来たものだが、今は世話人が手取り足取り教えながら縄をなってゆく。

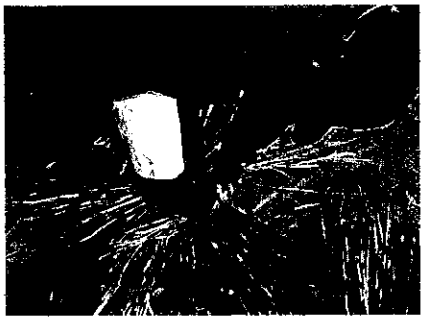
縄はワラジに使用する。長さは４ｍ以上、４本である。



③笠づくり（米俵に使用する桟俵ボッチ）

笠作りは、直径６cm 程度の藁束を作ることから始まる。藁束は根元から３０cm 程度のところを藁で束ねておき、それより先を３６０度に外側へ広げる。そして、その広げた藁束の中心を、円盤型の治具の上に載せ、中央に出ている釘に刺す。

組み上げは、治具の上に人が乗り、治具の円盤の周りに出ている藁を数本ずつ束ね、円周に沿って、２つの束を交互にひねりながら順々に内側に折りたたんでゆく。



３６０度一周して全ての藁を内側に折り込んだら、最後の束を笠の内側に埋めるように入れて形状が完成する。あとははみ出ている余計なケバをハサミで切って整形し、笠として完成である。

④男根づくり

男根も藁を束ねることから始まる。太さは７~８cm 程度で、根元から１５~２０cm の箇所を藁で結わえ束ねておく。この藁束の太さで男根の太さがきまる。西本宿では他の地区と比較すると太いようだ。

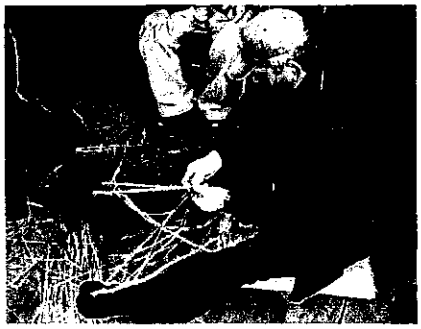
次にこの藁束の稲の穂先側を、束ねた個所から根元側に折り返してゆく。
この時、束の中央部にある数本の稲の穂先を残しておく。

次に折り返した穂先部分の処理である。穂先は先端から３０cm 程度のところを藁で束ね、その先は三つ編みにして、一本にする。

三つ編みは、最初に３つに分けた穂先のうち２本を交互に編んで行く。次に残りの１本をそれに合わせて行くように折り込む。
最後に三つ編みの穂先を藁で縛って出来上がりである。

⑤ワラジづくり（女陰）

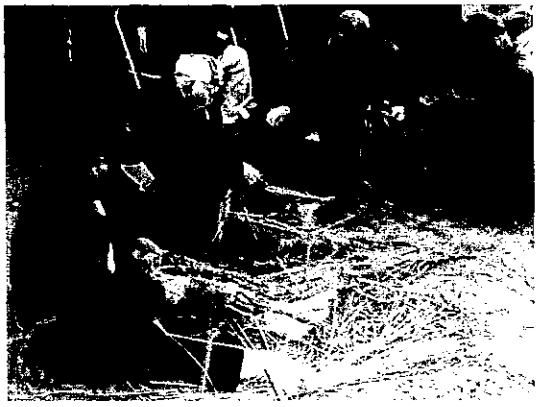
フセギづくりの中で、このワラジが一番難しいようだ。自力で出来る人は１人か２人、フセギづくり世話役の関口さんも付きっきりで面倒を見ていた。これは大きなワラジの真ん中に裂け目を入れたものである。



最初のステップは、編んでおいた縄を、両足の親指にかけて編む態勢を作ることから始まる。
そして手元の輪になった縄のところから、数本の藁をとり、４本の縄に交互に交差させてワラジのように藁を繋ぎながら編んでゆく。

下から１０cm 程度のところまで編みあがると今度は裂け目を作るように、片側のみ２本の縄の部分を、上に編みこんでゆく。次に、反対側の２本の縄の部分を、同じように上部へ編んでゆき、左右が同じ長さにったところで、裂け目はおわる。
そこから、また縄４本全部を通して交互に編んで上まで編み、親指をかけた縄の上部を２０cm ほど残しておく。

編み込む途中、左右の上と下、２か所、計４ヶ所に縄を通す輪を作っておき、手元に残った縄を、ここを通し上に持ってゆけば、ワラジの出来上がりである。



⑥フセギ（藁部品）の完成

３月２７日（日）は、藁部品のみの作成で、拂田稲荷神社のお札と飾り付ける青竹は、フセギを設置する次週４月３日（日）までに用意することになる。

３、フセギ行事･２

（１）フセギの設置

日時　４月３日（日）９：００~１２：００

この日は朝から冷え込んだ寒い日であった。先週と同じ西本宿農民センターに行くと、すでに拂田稲荷神社のお札は用意してあり、藁部品は青竹に取り付けてあった。

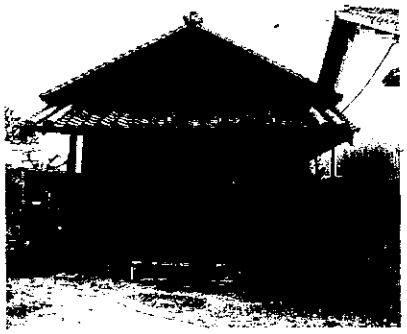
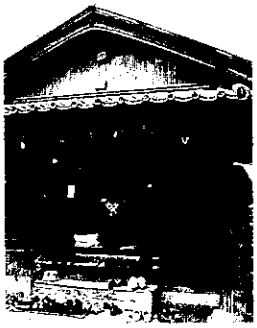
（２）春祈祷

この日は西本宿地区の春祈祷の日である。

センターには既に２０名以上に住民が詰めかけていた。春祈祷は、センター隣にある八坂神社でおこなわれる。

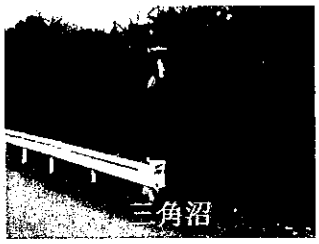
地区の役員全員が、お堂の中に入り、総代の松井友美氏から榊奉納の方法・参拝の方法を、教えてもらう。その後全員が榊を奉納、祈祷をして終わる。

この後はセンターで直会である。この集会でその年の当番４人が交代する。

（3）フセギの設置

センターでの直会後、いよいよ当番の人たちが軽トラックにフセギを積み、地区の出入り口４ヶ所に設置に出かける。



このようにして４ヶ所、昨年のフセギを取り外し、新しいフセギを設置し、この１年の地区の安全を祈願するのである。

２）西本宿（西２地区）のフセギ調査

西２地区でもフセギが行われているが、２０１１年のフセギは課題研究が開始される前に終了していたため、今回、講元の方をお訪ねして、状況をヒヤリング調査した。

日時：２０１１年　６月３０日（木）
　　１０:００から１２：００
面談者：西２地区　榛名神社　講元　田中 太平氏とご家族
　　９期郷土学部Ａ班　齊藤、沼尾、西村、Ｂ班　眞野

この地区には、３つの講があり、これを三社講という。
①榛名講　②大山講　③御嶽講である。

この各講に、講元が一人おり、田中氏は榛名講の講元である。
そしてこの講元の下に、年ごとに当番が籤引きで決まる。最初に１代参が４人選ばれ、続いて２代参が４人、計８人となる。なお２代参は１代参の代理を務めることになる。ひとつの講で８人ですから、３社だと２４名が１代参か２代参になるわけである。

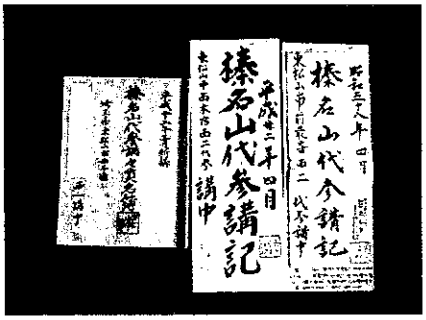
各講が満講になると全員で１泊２日、お山にお参りし、五穀豊穣祈願のお札をもらってくる。このお山への旅は、労働から解放される楽しい旅でもあったようだ。

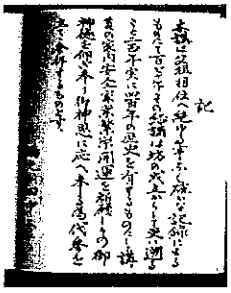
またこの旅の費用は、諏訪山の９９人持ちの土地（注）を市に貸している賃料を当てている。この賃料は、獅子舞にも使用しているとのことである。

（注）昔から、土地の人が共有で利用していた山で、入会権が認められていたものであろう。対象は西２、後元宿、悪戸の３部落である。

しかし３社講は約１０年おきに満講の年が来るため、連続になる事もあり、その場合には１年遅らせたりしている。
このような講は以前には、早俣や正代など他の地域でもあったが、今はこの地域だけに残っているそうだ。また御師さんも、こちらに来て泊って行くこともあったという。

１、フセギ行事
始まった時期は、榛名山の御師家にある講の代参の記録からすると江戸時代中期からのようである。





榛名講の記録

２、フセギの時期
３月１０日に近い日曜日。
午前中に西２の総会、午後に３社講、講連だけ集まってフセギづくりと設置を行っている。
昔は、３月１５日はフセギの日で、午前中から藁の作りものも作成し、午後に３社講をしていた。飾りつけはお札をもらいに行った当番がした。

３、フセギの飾り
藁の飾りはなく、青竹に榛名神社の豊作祈願のお札と天台宗常安寺の大般若のお札を頂いてきて青竹に挟み込んでいる。
榛名神社のお札は、昨年までは当番がもらいに山へ行っていたが、現在は神社から郵送で送られてくる。
（神社の手不足や当番が行っても昼食が出ないなどあり、神社側の都合で郵送となった）

4、フセギの設置

当番の４人が、地区の入口の各辻に立てる。

以前は、道を横断して藁細工品を、吊り下げていたが、今はお札を挟んだ竹を道路わきに設置するだけである。

5、講の人数

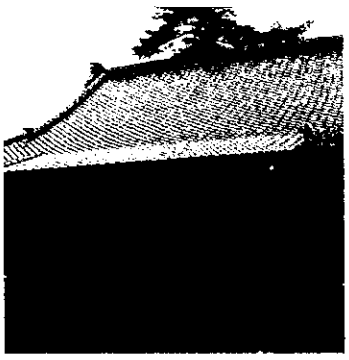
３５名程度に減少、以前は７０名近くいたが、農業の減少とともに減ってきた。３５名中、コメ作は２軒のみである。

6、継続のための問題点

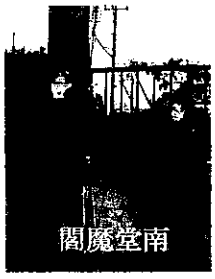
正直、もう止めようとの意見も出ている。今はお札も郵送であり、お札を頂きに旅する楽しみも無くなってきた。現在は、昔からの人が、「少なくなっても続けていこうじゃないか。」と言っている状態だそうで、このままでは３社が、そのまま残るのは難しいだろう。今、フセギを継続している後元宿も以前一度止めた事があった。しかしその年に幾人も亡くなる人が出て、また新たに神社詣でを再開したという。続けるには農作業と、それに伴う信仰心がなければ継続するのは難しい。

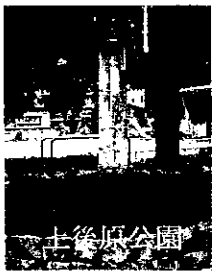
榛名神社

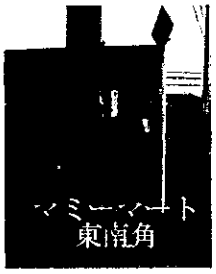
榛名神社のお札


天台宗常安寺

天台宗常安寺のお札







3）望月地区のフセギ調査

フセギ第３回目の調査として東松山の無形民俗文化財に指定されている望月のフセギを調査した。

日時：２０１１年　7月3日（日）　７：４０～９：３０

場所：望月会館

面談者：望月地区　大木 千秋区長、新井 武老人会会長

９期郷土学部Ａ班　齊藤、沼尾、西村、Ｂ班　眞野

望月地区のフセギは、後元宿のフセギとともに、東松山市指定の無形民俗文化財となっている。望月のフセギについて、会館の前に設置されている説明文を下記に記す。

市指定文化財　無形民俗文化財

望月のフセギ行事(平成１８年３月２４日制定)

悪霊や疫病がムラに入るのを防ぐために、ムラ境にシメを張る道切りの行事をフセギと呼んでいます。

岩殿の望月地区では、例年七月二日（近年はこの日に近い日曜日）の早朝、各家から一人ずつワラや竹を持って望月会館に集まります。そして区長あいさつの後、ワラで七五三にした注連縄や男女の象徴をかたどったものを作ります。男根・女陰ともワラを折り曲げたり編んだりして作りますが、男根には岩殿観音から受けて来た疫病邪気除けのお札を差し込みます。およそ二時間たつと四組ずつ出来上がり、準備が終了します。それぞれのフセギの飾りものは酒で清め、「身体健康・疫病邪気退散」という区長の発声で一同で乾杯します。その後、手分けで東西南北の四ヶ所のムラの境に向かいます。

ムラ境に着くと、はじめに竹を立て、ワラ製の男根と女陰を交わらせ（これは、「すでに入っているので、疫病邪気はもうムラには入らない」という意味があると伝えられています)、注連縄とともに竹に縛りつけます。

かつては道の両側に竹を立て、それに縄を張って道切りにしていましたが、昭和三〇年代末ごろから交通量が増加したため、今のような飾り方に変わったといわれています。

東松山市をはじめ比企地区ではこうしたフセギ行事が行われるところが多く見られます。こうした行事は先人から伝えられ、長い間続けられた信仰心を語る上でも貴重な文化財と考えることができます。

文化財を大切にしましょう。

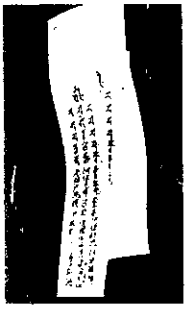
平成一九年三月
東松山市教育委員会

当日、朝、７時４０分にフセギ作りの会場、望月会館についたが、すでに会場には多くの住民が集まり、会館の玄関口では藁を打つ人、座敷では青いビニールシートが敷かれ、フセギづくりに入ろうとしていた。集まった住民は７０人程の住民である。

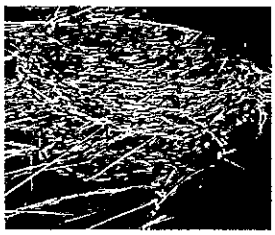
フセギに使用する構成品

望月地区フセギの構成品

①岩殿正法寺のお札　４枚
②藁男根　４本
③藁女陰　４個
④藁縄の注連縄　１本



⑤藁縄：これは参加した住人が、それぞれ縄をなって
フセギに束にして着ける。望月に固有の特色である。
⑥青竹　４本



１、フセギの作成

青ビニールシートの上や廊下まで多くの住民が各自それぞれに細工物を作っている。良く見ると女性を含め多くの人は藁縄をなっている。藁縄は１人で２～３ｍを作るが長さの決まりは無いとのことである。また当日は東松山ケーブルＴＶも取材に訪れていた。

望月地区のフセギづくりでは、フセギを飾る地域に合わせて、住民は４つの班に分けられており、各班でフセギを１セット作成する。

１班　馬頭観音、２班　地蔵尊、３班　徳寿橋、４班　児子沢

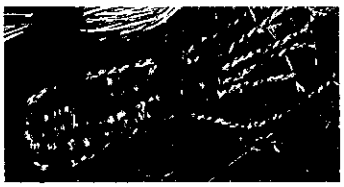
この４班である。この班分けは、まだ望月部落が小さく、所帯数も数十世帯の頃の班分けである。現在の行政区分の班分けとは異なってきている。現在は世帯数も増え１４５世帯となり、行政上の班数は１１だそうだ。

次に私たちが気になるのが、フセギ作りの後継者であるが、やはり「現在作れる人は５人程度で少ない。」との話である。望月の技能の継承であるが、このように会館に一堂に集合して、作成するようになったのは、３年ほど前、関口氏が区長のころだそうだ。それまでは各班で藁モノを作成してから、会館に集まり、お札をつけて飾り付けに出かけたそうである。変更の目的は、一堂に会し、そこで作成することにより技能の継承が可能になるようにとのことであった。

２、フセギの形状

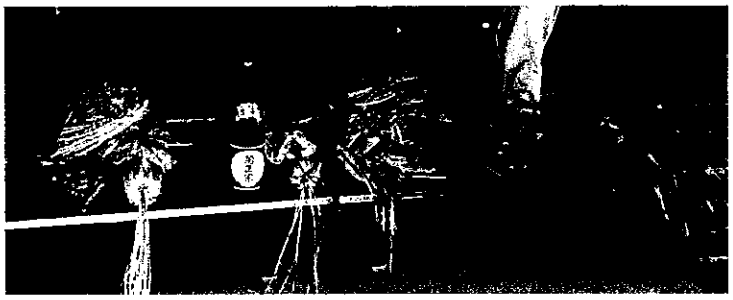
フセギの形状は、他地区と大きく変わるところはないが、女陰については西本宿（西一）と比較すると形が小さく、下部と上部に全面編みの部位がなく、すぐに割れ目となっている。

左写真：望月
右写真：西１

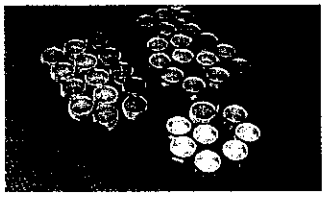


フセギの形状について、ある古老によれば、昔、この地域で性病がはやった、そのために男根女陰の藁細工を作って飾ったとのことである。
また女陰が小さくなっているのは、大きく作ると２人も３人も入れられ、性病のもとであるとの戒めとのことであった。
また注連縄には、７本、５本、３本の数で藁を垂らして、あたかも紙の切下げが下がっているように作る。

３、フセギの完成
８時３０分、各班のフセギが１セットずつ、計４セット出来上がり、舞台前のテーブルの上に並べられた。お清めの清酒も置かれている。
作業は、わずか１時間程度でフセギは完成であった。



４、フセギの清めと解散
フセギが全部、完成し並べ終わると、区長と当番がフセギの周りに集まり、フセギをチェックし男根に正法寺のお札を挟み込む、その後、フセギに清酒をかけてお清めをする。その間に会場はきれいに清掃されていた。
フセギが完成すると、区長から声がかけられ皆が会館の座敷に集合する。そこで区長から挨拶と藁と青竹を供出してくれた方へのお礼の言葉が述べられ、最後に皆で茶碗の清酒でお清めを行い、散会となる。

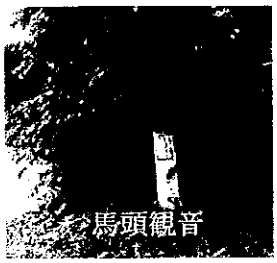


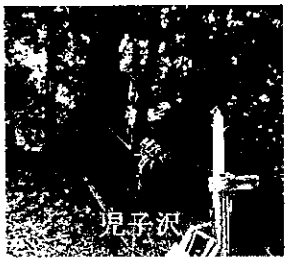
５、フセギの設置
散会後、各班ごとに、それぞれフセギを設置する場所に出かけて行く。

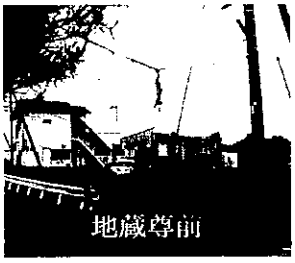
我々は、会館から一番近い馬頭観音の場所へ同行した。ここには一本の桜の木と馬頭観音の石碑が建っており、この桜の木に昨年のフセギが結びつけられていた。

そこで古いフセギを取り外し、新しいフセギを取り付け、最後に皆で手を合わせ、１年の疫病災難除けを祈願、散会となる。

フセギの設置は、会館前のフセギ紹介文にもあるように、現在は道路の片側に設置するが、地蔵前のみ、昔のように道路を横断する形で、吊り下げてあった。





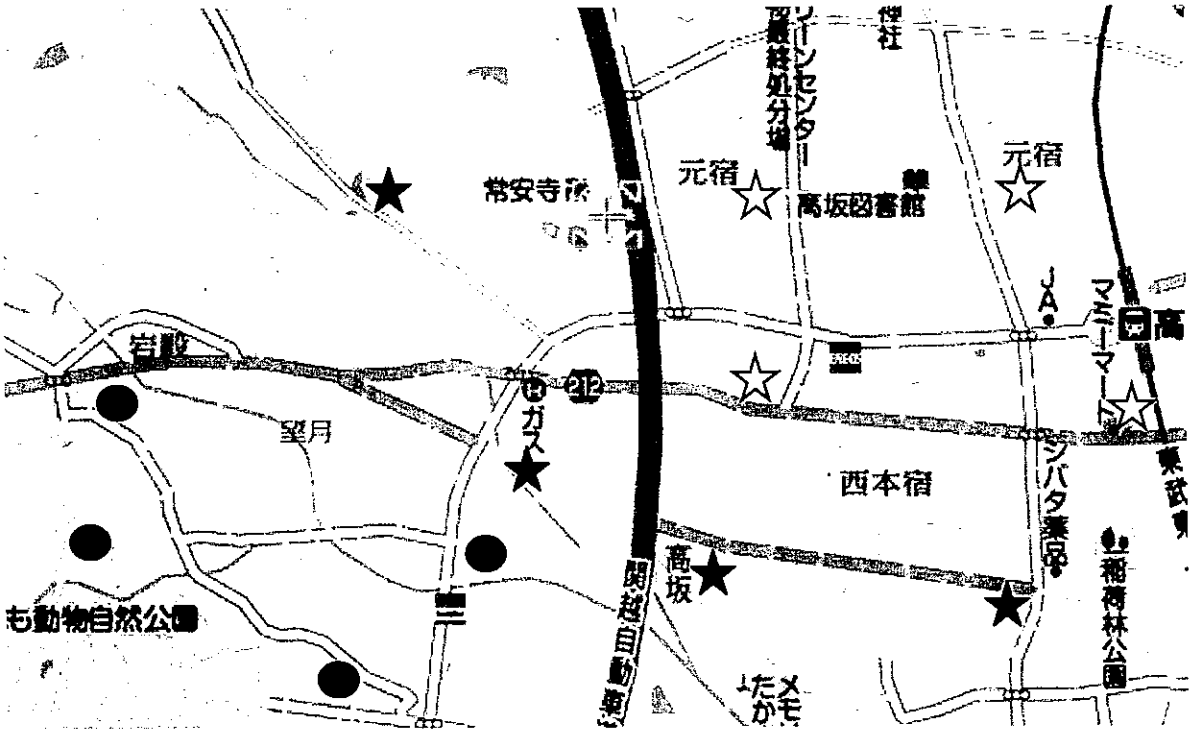


これで４ヶ所全てにフセギが設置され、この先１年間、望月地区を疫病や災難から守ってくれるのである。

望月のフセギは、住人全員参加の体裁を取っており、１人１人が縄の一本でもなって、厄除けを祈願する。他の地域と比較しても魅力的な特色のある行事であった。

高坂地区のフセギの設置場所

★ 西本宿（西１）　☆西本宿（西２）　●望月



なお課題研究のテーマとして、西１と望月のフセギの作り方を映像として残すため、ＤＶＤを作成した。

作り方など具体的内容についてはＤＶＤを参照願います。

２、大般若講

大般若講とは

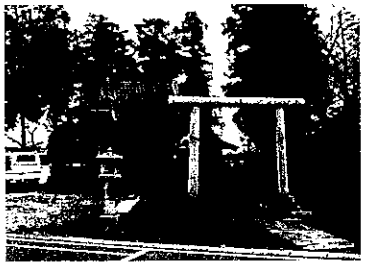
大般若（大般若経を転読の意）とは⇒県立歴史と民俗の博物館資料より

紀元１世紀に成立した大般若波羅密多経の経典６００巻。日本では天平時代から鎮国除災を目的に宮中・大寺院で実施していたが、やがて全国の真言・天台等の寺院に伝播し、その土地の民間の信仰行事と習合した。

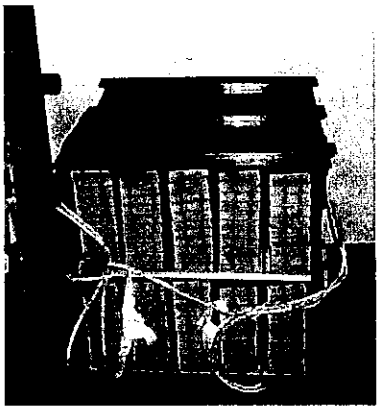
住職の転読が終わると大般若経を大きな箱に入れ、若い衆が担いで村廻りをして厄を祓う行事である。

１）下青鳥（下郷地区）の大般若講

下青鳥下郷地区
日時　４月２日（土）
場所　天神社境内



大般若経１箱には１００巻の般若経が納められている



１、大般若経が巡回する行列の構成

①大般若講６００巻

これは１００巻ずつ箱に入れられ、それぞれの箱に担ぎ棒がつけられている。

浄光寺（注１、Ｐ１７）の大般若経は、第５７８巻の奥書によると貞亨２年（１６８５)熊井村の篤志家より寄贈されたもので、江戸期の版木刷りであり、祈願は国家安全・家内安全そして五穀豊穣である。

②和紙の幟を付けた青竹

幟には「奉請大般若全函　下青鳥中」と記されている。

③浄光寺の魔よけのお札

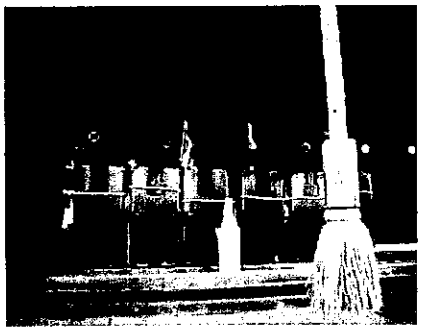
お札は箱に入れられて運ばれ、各家に貼付される。

④賽銭箱、この箱にも担ぎ棒が取り付けられていた。

この日、村社天神社境内には氏子衆が７時３０分には集合していた。大般若経６００巻は軽トラックで浄光寺より運ばれてきた。この大般若経が１００巻ずつ納められた６つの箱は神社内で担ぎ棒が取り付けられる。

また同時に地域内を巡行するお札箱、賽銭箱、和紙の幟を付けた２本の青竹も用意されていた。

2、大般若講の巡回

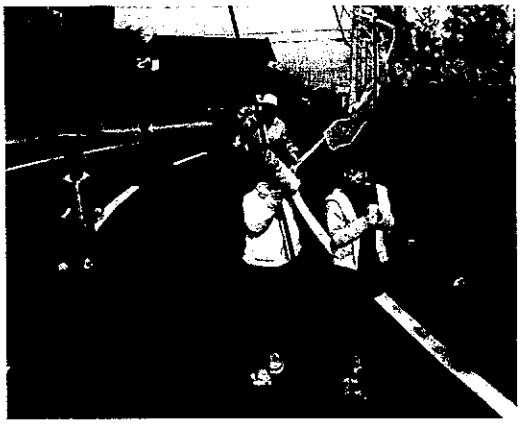


左写真
浄光寺より運ばれてきた
大般若経

右写真
神社内に置かれた大般若経、
上には賽銭箱が置かれている。

８時になると浄光寺の住職が来て、神社の前で納経を行い、それが終わると皆でお清めをし、順次出発となる。

行列の先頭は子供たちである。２本の幟を持って楽しそうに歩いていた。その後に大般若経６００巻、住職、賽銭箱と続く。
地区内を巡回する順番も決まっており、神社の近くから順に回って行く。



各家では大般若の隊列は、その家の縁側から入り、土間へと抜ける。その後、玄関先で住職が大般若経の１巻を持ち経文を唱える。経文が唱え終わると魔よけの札が渡される。この札は玄関の脇、左側に貼られる。最後に、その家の家人は、出口で賽銭箱に賽銭を入れ、その家でのお祓いが終了する。

このようにして約３０戸の全ての家を廻り、悪疫退散のお祓いをするわけであるが、現在では、家の作りも変わり、ほとんどの家では、家の中には入らず、玄関前で祈祷するのみであった。

この巡回の間に、自治会長、当番、その他篤志家の家では飲食やお菓子の接待が行

われる。子供達にはお菓子の袋が配られる。子供達にはこれが楽しいらしい。

約３０戸、すべての家の巡回が終わると、
大般若経を蔵入れし、天神社の宮司から
４体の「辻札」を受領する。
右の２枚のお札を合わせて１体となる。
このお札２枚を重ね、和紙で包み、青竹に
挟んで下郷地区の４つの辻に立てられる。
これは疫病悪霊を防ぐ、フセギとなる。
全ての行事が終了すると、慰労会を行い、
大般若講は散会となるのである。

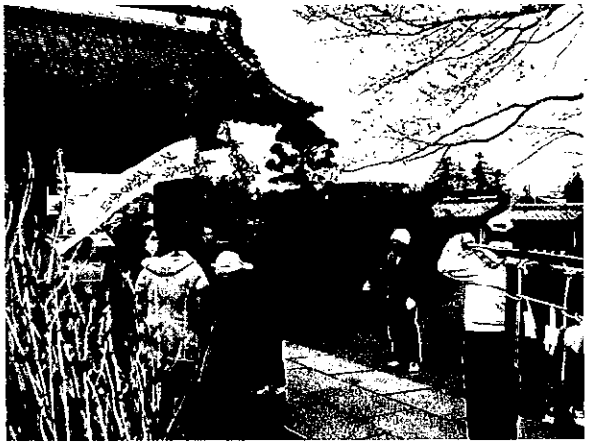
大般若の辻札

２）下青鳥（上郷地区）の大般若講

（対象戸数：約１００戸）

日時　４月３日(実施日は固定している)

場所　浄光寺境内



上郷地区の大般若講は浄光寺の在所であり、この寺から大般若講は出発する。
行列の構成及び手順・内容は、下郷地区と同じであるので、ここでは省略する。

（注１）浄光寺概要

大願山成就院と号する。本尊は地蔵菩薩。仁治元年（１２４０）比叡山の僧覚全に

より創建される。最盛期天保１２年（１８４１）の規模は、敷地面積９８００坪、末寺３９寺。

３、お獅子様

お獅子様とは⇒県立歴史と民俗の博物館資料より

悪霊や病気を祓う呪力があると信じられている獅子頭を奉持して、村中および各家を残らずに祓って廻る行事である。獅子頭が各家を廻る際には、土足のままで座敷に上がることが特色となっている。使用する獅子頭は村所有の場合と特定の寺社から借り受ける場合がある。

一般的には使用する獅子頭は１頭であるが、比企、入間地方では２頭一組のケースが多い。また獅子頭には「川流れ」などの伝承をもつものが多い。

１）大字古凍地区のオシッサマ（お獅子様）

日時　４月１０日（日）

場所　鷲神社境内

当日、朝８時、オシッサマを調査すべく鷲神社を訪問したが、あいにく今年は、３月に発生した東日本大震災により、祭りは自粛となり、神前に「オシッサマ」を安置して町内の氏子がお参りする方式になった。

鷲神社には「御祭禮」の看板と切り紙が下げられた注連縄が張られていた。まずは氏子連が社殿に入り、ご祈祷を受け、その後境内の小さな石の祠の前に飾られた獅子頭の前でお参りするのである。

そこで、この調査グループでは例年の「オシッサマ」の様子を、聞き取りで調査することにした。

（聞き取り調査内容）

（１）鷲神社について（古凍史話より抜粋）

・設立：治承２年（１１７８年１０月１４日）、すなわち源頼朝が旗上げする２年前に鷲宮町の鷲神社から勧進されたという。

・祭神：天穂日命、武夷鳥命、天日鷲命の３神

・主な祭り：春祭り、オシッサマ、夏祭り（天王様）
この夏祭りは東松山市３大夏祭りの一つに数えられている。

・祭りの始まり：江戸時代、文化１０年（１８１３）に全氏子の合意で、神輿大小２基、獅子頭２基を新調した。

（２）オシッサマ

①祈願　　悪疫退散、五穀豊穣

②獅子頭　　村持ち　　雌雄　各１基　（雄は角がやや大きい）

③祭日　　４月１５日に近い日曜日、今年は４月１０日であったが、以前は４月１５日に決まっていた。

④獅子頭　　獅子頭には白と緑のサラシの布が付けられる。長さは４～５ｍで大人４、５人がつかめる程度の長さ。

（３）祭りの手順

獅子頭には長いさらしの手綱が結んでおり、この獅子頭を先頭にして鷲神社をスタートする。氏子連は獅子頭に取り付けた手綱を掴み、その後に神主、続いて当番が桟俵（これがお賽銭入れとなる）を持ち、家々を廻るのである。

巡回する家は、以下のように多くの家がある。

古凍地区　約２５０戸、北新地区　約８０戸、根岸地区　約１００戸

各家では、玄関より入り、下の出口か、座敷を抜けて縁側より出る。これも大般若と同様に最近、家の造りが変わり玄関にてターンする家が増えたそうだ。オシッサマが家を出る時に、家々ではお賽銭を桟俵の上に置くのである。

このようにして　各家を順に回って行き、小字の境界で、氏子連は次の地区の氏子と交代する。この交代時に巡行に加わった人は、獅子頭に付いた緑と白の手綱をちぎり、お守りにするために持ち帰るが、このお守りは大変にご利益があるといわれ、緑の方が人気だそうだ。

一方、当日は、「お囃子連」（これは同好の士が連を組み奉納する）を乗せた山車が、にぎやかにオシッサマを追うように表通りを流してゆく。オシッサマ巡回の途中では、その土地の篤志家の好意で休憩所が随時設けられるが、最近は、各地区の町会事務所を休憩所として利用する方式に変わった地区も多い。

全ての巡回が終わると鷲神社より９枚の辻札をもらい、それを地区の境９か所に立てオシッサマは終了する。

また祭りの当番は、氏子の各家からお札料を集め、鷲神社のお札（右写真）を配布する。

調査を終えての考察

１、浮かび上がった問題点

東松山の民俗行事の現状を調査してみると、２１世紀の今日、日本各地で発生している社会現象が、この行事にも影響を与えていることが判った。

・農業人口の減少と地域住民の多様化⇒五穀豊穣など祭りの意義の消滅。
・農作業の機械化⇒農作業での共同作業が無くなり、住民同士の連帯感の薄れ。
・核家族化⇒親から子への技能の継承の難しさと地域住民間の絆の薄れ。
・少子高齢化⇒体力を必要とする行事の遂行が困難かつ高齢世帯の孤立。

２、民俗行事に対する私たちの基本的考え方

・民俗行事は存続させるべきである。

（理由）

・地域コミュニケーションの維持・強化に有効である。今般の東日本大震災を振り返っても、常日頃から地域住民間でのコミュニケーション、またそこから生まれる連帯感があれば、大惨事の発生に対しても地域での災害復興（物的、精神的両面で）の大きな一助となる。
・民俗行事は、その地域の住民に綿々と伝えられてきたものであり、一度途絶えると、現在の社会状況では再興は非常に難しい。

３、提言

①民俗行事への高齢者や子供の参画（参画できる場や工夫をする）
②学校教育への折り込み
例）東松山民俗行事見学会、民俗行事体験会、民俗行事映像体験 etc
③記録と保存活動
・映像化　　・ライブラリー化
④東松山市立歴史と民俗博物館の建設
・東京のベットタウン化している当市での市民意識向上に役立つ。
・市内の各所から発掘された「鉄製短甲」・「三角縁神獣鏡」その他貴重な土器や埴輪、また中世、比企の歴史を彩る武士活動など歴史的資産に恵まれているが、展示する場所もない状態である。現状１０万近い人口を抱える市として、このような施設が欠如していることは恥ずべきことではないだろうか？

最後になりますが調査にご協力頂きました下記の方々に厚くお礼申しあげます。
以下順不同
フセギ関係⇒松井 友美様（西１地区　区長）、関口 文一様（西１地区フセギ世話人）
田中 太平様とご家族の皆様（西２地区、榛名講講元）、大木 千秋様（望月地区区長）、
澤田 昌生様（箭弓稲荷神社宮司）
大般若関係⇒前原 将雄様（天神社宮司）、林 康達様（浄光寺住職）
オシッサマ関係⇒澤田 稔行様（鷲神社宮司）、吉本 秋夫様（元氏子総代会会長）
防ぎ全般⇒二階堂 実様（埼玉県立歴史と民俗の博物館）